

| 議 事 録 (要旨) | | | | | |
|--|--|------|------------|-----|----------------------|
| 配布先 | 主催 企画課 | | | No. | |
| 議事録名 第 2 回佐久市 CCRC 検討会 作成日 平成 27 年 8 月 21 日 | | | 確 認 | | 記録者 |
| 日 時 | 平成 27 年 8 月 19 日(水) | 開催場所 | 議会棟 全員協議会室 | 時間 | 16:00 ～ 17:35 |
| 出席者 | 委 員：竹尾恵子、雄谷良成、甲斐一郎、辻一郎 オブザーバー：市長 柳田清二、交流推進相談員 山村通夫 長野県企画振興部地域振興課 主任 伊藤義彦、 主事 土屋明久 事務局：企画部長 矢野光宏、企画課長 佐藤照明、土地調整係長 羽毛田邦治、土地調整係 畠山武尚 地域局長 依田猛、地域整備室長 遠藤修、室長補佐 市村志郎 | | | | 委員 出 4 人 欠 1 人 |
| 提出資料 | ・会議次第 ・資料 1 佐久市 CCRC 構想（素案） ・参考資料 中間報告に向けて更に深堀が必要な論点（国 日本版 CCRC 検討会資料） | | | | |
| ≪ 1 開会 ≫ ≪ 2 市長あいさつ ≫ ≪ 3 会議事項 ≫ (1) 佐久市 CCRC 構想（素案）について 事務局より説明 < 質疑応答 > 委員 なかなかよくまとまっていると思う。都市型、農村型という特色を出している点も良いと思う。いくつか質問があるが、1点目として、サ高住を建てて人を呼び込むということであるが、どのくらいの人数の移住を想定しているのか。2点目として、国の有識者会議でも、運営主体というのは民間事業者を想定しており、自治体はその調整やサポートということになるが、運営主体についてはどのように考えているのか。3点目は、市というよりは竹尾座長にお聞きしたいが、CCRCでは、カレッジリンクということで、大学にある施設を利用したり、講義を行うなど、大学と連携して事業運営をしている事例もある。佐久大学では、そういった連携は可能か。 事務局 どの程度の人数を想定しているのかということについては、地域によって受け入れ | | | | | |

られるポテンシャルというのが全く違うので一概には言えないところがある。臼田地区で100～200人受け入れられるポテンシャルがあるかと言えば難しいと思う。一方、佐久平駅周辺で、20～30人という規模では成り立たない。実際にどのくらい受け入れるということについては、具体的な地区で構築していく時の議論で検討していくことになると思う。2点目の実施主体については、民間を考えている。ただ、民間事業者には、佐久市のコンセプトや考え方を十分理解したところをお願いしたいと考えている。12ページに運営推進機能ということを示しているが、市で持つのか、市が支援するのか、何か制約をつけながら行うのかというのは、実施していただく事業者と詰めて決めていくことになる。この事業運営機能をどうするのかというのが一番のポイントになると考えているが、基本的には民間事業者を想定している。

事務局 12ページのところに示されているように、東京圏を誘致拠点として、情報を発信していくことを考えている。そこで移住希望者の相談に乗り、市のコンセプトに合致した人に来てもらう。また、そこでマーケティングも行い、ニーズを把握する。一方で、受け入れ側も、どんなコンセプトが良いのか、どのくらいの規模なのかということを検討していく。東京の窓口と地元で連携を取り合いながら進めていくことで、臼田地区、佐久平駅周辺それぞれの方向性が徐々に定まっていくと思う。

委員 3点目の佐久大学との連携については、大学としてはかなり地域と関わりを持っている。以前は、老人大学院というものが佐久市で行われており、そこで講義を引き受けたことがある。また、佐久大学では、公開講座も行っており、自分に合った医療や、いかに医療と関わっていくかということなどについて講演したりしている。また、これまでは、先生方が、ばらばらに地域へ行って活動していたが、これから新規に求められる活動については、コミュニティセンターのような部署を大学に設置して、そこで活動をまとめ、「見える化」するというのも始めている。そこでは、佐久地域だけのことでなく、国際的な活動も含まれており、発展途上国から来た人たちが地域に入っていく、佐久地域の地域ケアの在り方や健診、健康教室などを見学し、交流や会話をする機会を設けており、それを大学がコーディネートしている。大学として、できるだけ地域に入っていく取り組みを行っている。

委員 実際に事業をやっている者として現場に即した意見になってしまうが、何点か伺いたい。佐久市の地域特性の中で、「身体健康」だけでなく、「心の健康」、「幸福感の追求」ということに取り組んでいるのは素晴らしいことだと思う。これをどんな形で実現していくのがとても大切である。私は国際協力機関の理事長もやっているが、ブータンの場合は、町に貢献することや人に貢献するという役割を担っていると感じる事が幸福感に繋がっている。CCRCの考え方にも、そういった要素があると思う。年をとっても自分が担っている役割があると感じられることが大事

であり、辻委員の発表にも示されていたが、生きがいがある場合、役割を担っている場合、高齢者の就業率が高い場合は、地域の健康寿命が長いということであった。そういったことは、今のCCRCの考え方の中に盛り込まれていることである。まだ盛り込まれていない考え方としては、佐久市では可能性があると思うのだが、「コスタリカにおける幸せ感」というものである。これは、また違った尺度の考え方であるが、コスタリカでは、自分の国に誇りを持っている人が多い。「軍隊を持っていない」、「医療・教育・福祉が無料であること」、「エコツーリズム発祥の地でもあること」などあるが、人間だけでなく、自然も大切にしている国である。自然を破壊してしまうと、自分たちも生きていけなくなるということをしっかり考えている。コスタリカ人というのは、「自然を愛し、平和を目指している国民」ということにプライドを持っている。そういった考え方が、「幸せ感」に繋がっている。そういった考え方は、今の「日本版CCRC」には入っていない。もっと大きな枠で捉えることも大事である。佐久市は、「世界最高健康都市」ということを掲げており、実際にこういったことが可能な場所なのではないかと思う。この構想の中の文言で、少し弱いと思われることは、この会議で配布されている水（佐久の水）のパッケージに、「地域の水は地域で守る」ということが書かれているが、こういったことを打ち出していくことが重要である。佐久市の人達が、後世の子供たちのために、「水を守っていく」、「自然を守っていく」という姿勢を持っているということをしっかり打ち出していくことが移住にも結び付いていく。移住を考える人は、地域だけでなく、そこに住んでいる人を見る。この地域の人達は、「水を大切にしている」、「自然を大切にしている」、「町を大切にしている」ということが伝わるようにするのが大事ではないか。そういった意味で、「エコツーリズム」ということも載せておくと良いのではないかと思う。この構想では、「大都市圏との距離」や「高速交通網の整備」というのは有利ということには分かったが、あとは、「市内の交通ネットワーク」というのが大事である。ネットワークには物理的な交通のネットワークはもちろんだが、もう1つ、「情報のネットワーク」というのが重要である。「都市型」、「農村型」、どちらでも重要になる。移動手段、地域間を結ぶ交通網をどのようにしていくのかということについて教えていただければと思う。また、「情報のネットワーク」についても教えていただきたい。もう1つは、竹尾座長も国際的な関わりということで触れていたが、CCRCには、多世代との関わりが含まれており、更には、多文化・異文化との共生という問題が考えられる。東京圏からの移住ということであれば、国際化ということもより身近になってくる。その点はどのように考えているか。

オブザーバー

最初の「心の健康」、「幸福度」ということであったが、「ソーシャルキャピタル」という考え方がある。人と人との繋がりによる心の健康が、身体を健康を引っ張るといふこともある。そういったことにも取り組んでいきたいということから始まったものである。佐久市に取り組んでいることの1つに自殺対策がある。この自殺対策というのが象徴的なものであるが、キーワードの数字が3つある。「4」と「72」

と「97.3」という数字である。警察等で色々と分析して出てきた数字であるが、自殺をされた方の悩みの数の平均が4つということである。「97.3」というのは1997年3月ということだが、その時期に自殺者が一気に増加した。拓銀や山一証券が破綻した時の決算期である。つまり、経済的な事情が、自殺を引き起こす大きな要因になるということが分かった。もう1つの「72」というのは、自殺をされてしまった方のうち、専門家に相談していた割合である。72%ということで、多くの方が専門家に相談をしているにも関わらず、自殺に至ってしまっている。4つ以上の悩みを抱えることによって、その状況から脱することが難しくなってしまう、自らの命を絶ってしまっている。このような状況を受けて、市としても、悩みの数を減らしたり、たとえ悩みの数は一緒でも、その中身を軽くしていく手助けをしていきたいと考えている。そういったシステムがあることによって、悩みや生活の中のつらい部分、苦しい部分というのを解消していくことが出来得ないものかと思っている。実際に、うつ病の方が多重債務を抱えている場合、病院で相談しても債務については対応できない訳である。そういったことが4つも5つも重なっていけば、1人の専門家では不十分であり、様々な専門家のネットワークというのを進めていきたいと考えている。心の健康というのは、人と人との繋がりを深めていくこと、今時の言葉で言えば「きずな」ということかもしれない。人と人が支え合うことが大切であり、そういった仕組みを整えていきたい。もう1つは、困窮状態にある人に対して、社会としてサポートしていく機能を整えていきたい。相談業務の体制を整えていきたいというのもある。また、子どもに対しても、比較的多くの自治体でも取り組んでいるが、チャイルドラインであったり、また、学校教育ということも含めて対応していきたい。「幸福度」ということについては、「幸福のサイクル」ということを常々申し上げている。幸福を感じることが出来る状況というのを考えていくと、4つほどの要素があるのではないかと考えている。「愛されること」、「褒められること」、「期待をされること」、「期待に応えること」、それと先ほどおっしゃっていたが、「役割を持つこと」というのが非常に大きいのではないかと思っている。構想の中に出てくる「学校給食応援団」では、3つの組織が整ってきているが、移住者を中心として整ってきているもの、若者を中心として整ってきているものがある。浅科の「学校給食応援団」の団長は移住をされてきた70代の方である。子ども達に、いかに愛情を込めて給食を提供できるかということを競うように取り組んでいる。年に何回かある交流会で、子供達と直接接して幸福を感じることが、この方々のエネルギーになっていると思う。臼田では、若い女性が団長をやっているが、8反部の田畑を耕しているとのことである。きゅうりを作るにしても、子供達のために、星形やハート形のきゅうりを作ったりしている。そのことを伝えるツールとして、映像や写真を使い、自分達が愛されているということの子供達にも感じてほしいと考えている。また、そのことに関わりを持つ人についても、「幸福のサイクル」のスパイラルに入っていただくような工夫をしていきたい。今は1つの事例として紹介したが、そういった機会を用意していきたいと考えてい

る。その地域に入ったならば、いくつもの選択肢があるという状況を作っていきたい。また、現在、文化施設、図書館、美術館の館長を公募で募集しているが、応募される方には、移住してきた人が手を挙げるケースが多い。その人達のスキルというのは非常に高い。幸福感ということでは、学ぶということも大事であるが、今まで培ってきたスキルを表現する場、ある意味では「期待される場」を作るということも大事である。地域への誇りということで、もう一点加えさせていただくと、春日という地域があり、「道祖神祭り」が1月3日に行われる。やぐらがあつて、たくさんさんの提灯を付けたりしている。その地域の人達は、それを観光化しようという気持ちは全くない。そこから感じることは、祈りというのは、本来そういうものということである。祈りというのは、とてもプライベートなものであり、五穀豊穡というのも、地域全体のことを願うというよりは自分の田んぼの豊作を願うというものがある。家内安全というのも自分の家の安全を願うということである。道祖神というのは、子供の健全育成を願うものであるが、それを人に見せ、人を呼ぶということの関心が薄れるということは、祈りに対して純粋に思うほど、そういう傾向になると思う。しかし、そういった場に立ち会えるとすれば、それはとても楽しいことであると思う。子供への愛情が非常に表現されており、祭りの原形ではないかと感じる。そういったことを大切に、地域に暮らしてきた先人の意志や地域の水というものを守っているということを十分お知らせして、この地域を作ってきたものを知ることにより、その地域への誇りというのは生まれてくるのではないかと。地元の人が、自分の故郷に愛着を持っているということ、訪れる人にも感じてもらえる仕組みを作っていきたいと思う。

委員 佐久市は、確かに高速交通網は発達した。しかし、生活の足というのも重要である。昔は自分で運転していたが、年を取ると運転も段々億劫になってくる。そうした時に足をどうしようかということになる。若いうちは良いが、高齢化してくると、どうしてもそういう問題があるが、どのように捉えていけば良いか。

事務局 市内の公共交通網ということだが、おっしゃる通り、確かに弱いというのはある。南北にJR小海線が走っており、東西については民間のバスが走ったりしている。しかし、あまり人が乗らないので、本数は非常に少ない。それを補うということで、市で巡回させるようなバスや、臼田や望月では、デマンドタクシーを予約で走らせている。ただ、なかなか利用が進まないのが現状である。4年前に交通網を作りなおそうということで、計画を作り直してはいるが、なかなかうまくいっていない。今年、再度、見直しをかけようということであるが、全体を俯瞰する中で進めたいと考えている。現状は、買い物や移動については、自家用車ということになってしまっており、大きな駐車場がある大型店やスーパーで買い物を済ませている。お年寄りについては、旧町村の役場付近にお店も残っており、地元で買い物をするということもある。

委員 乗客が少ないということは、運営が厳しいということと思う。そういう状況では便数は増やせないのではないか。

事務局 運営で赤字になる部分は、市が補っている。住民があまり乗らないという状況なので、民間事業者も、なかなか便数を増やせない。住民にも、できるだけ公共交通を使うことで、残していこうと訴えかけはしているが、なかなか難しい。

委員 2つの考え方があると思う。1つは、福祉輸送という方法がある。これは、福祉の予算の中で実施されている。もう1つは、核となる場所を作る方法である。その場所が魅力的な場所になれば、そこに人は集まり出す。そういったものをむやみに作って繋ぐのではなく、ある程度集約させて作る。人は、交通機関ありきではなく、魅力的なところに集まっていく。そうすると必然的に交通機関が必要になってきて成立する。例えば人が集まるような場所で野菜を売ったりする。自分の所の施設では、入浴に来た人に対して野菜を販売しているが、そのうち、お風呂は入らず、野菜を買うためだけに来る方も出てくる。そんなように魅力を増やしていくことも大事である。先ほど、「学校給食応援団」という話があったが、とても素晴らしい仕組みだと思う。こういったネットワークがあれば、他の地域でも展開していくことも可能であるし、考え方を広げていけば、応用もできるはずである。何かそういった核になるものを作って、その魅力を広げていき、住民だけでなく観光客も取り込めるような施設にできれば面白いと思う。

事務局 高齢化社会ということで、今後、足の確保というのは、とても重要になってくる。巡回バスということで実施しているが、今も利用者数に応じて便数を増やしたり減らしたり、あるいはコースを見直したりしている。デマンドタクシーでは、必要に応じて、必要な時にということで進めてきた。これからは特に、人が集まり必要となる施設、例えば、浅間病院や佐久病院などを通るなどコースの検討や便数についても、地域ごとに見直すなどしていく必要がある。今年度、環境部とも協議して見直していきたい。

委員 コンパクトに、グッと色んなものを集めると、そこを単純に繋いであげるだけでよくなる。集積の度合いをどうするかということだと思う。

事務局 臼田地域がそのような集約した形になりつつある。病院、役所、スーパー、商店街といった機能が集約しており、そこを中心としてデマンドタクシーを走らせ、その中は、ぐるっと一周巡回するように通している。利用も進んできているようである。

委員 情報関係はどうなっているのか。

事務局 情報については、補助金を使い、市全域でケーブルテレビが入れる状況になっている。ただ、加入率は低い状況であり、加入促進に努めている。

事務局 情報について課題は3つあったと認識している。1つ目はコミュニティ放送局の開設であり、2つ目は双方向型ケーブルテレビの開設、3つ目が情報化の拠点施設の整備ということがあった。そういった中で、中込にある情報センターを拠点として、国の補助金を使って、IT講座を実施したりして情報技術を学んできた。平成元年にFM佐久平を開局した。そこで市の情報を流している。平成16年に双方向型のケーブルテレビを開局した。この3つを整備して、情報関係については進めてきた。今後は更に加入を進め、魅力ある番組や魅力ある放送を作っていかなければいけないと考えている。

委員 「身体の健康」だけでなく、「心の健康」ということについて、顔を突き合わせた泥臭い情報の伝え方もできると面白いと思う。私共の法人は障害者関係の事業から始まっているが、一般的な情報ツールというのは使えない。そうすると、フェイス・トゥ・フェイスで伝えるしかない。認知症の方も、一般的にはテレビから情報を得ることはできなくなる。そうすると、独居老人のお宅に、配食サービスなどのフェイス・トゥ・フェイスの情報提供が必要になる。うちの事業所では、配食を障害者が配達している。安否確認をして、それで食事を置いてくるが、そこで、お宅に上がって会話することもある。食事というのは、食べるという行為だけでなく、そこでの会話やふれあいというのが非常に大事である。お年寄りからの電話では、メニューの注文というより、あの人に配達してほしいという要望が出てくる。ふれあいというのが、お年寄りを非常に元気にしている。その配食の際には、情報も持っていくようにしている。例えば、「こんなイベントがあるので一緒に来ないか」と聞いたり、また、誕生日であれば、ケーキを持って行ったりしている。そうすると、お年寄りも、誕生日を楽しみにするようになる。情報の伝達を、それ専門にやるとなると、非常にコストもかかる。配食サービスは、民間でもあるが、クオリティーの問題もある。うちでは、障害者が配達を行っている訳だが、「体調が良くない」という情報があった場合は、次の配達時には、看護師が一緒に行くこともある。医者に行くのは、少しハードルが高いということもあると思う。そういうフォーマルでない情報のキャッチボールをすることによって、地域に守られているという感じが伝わっていくのではないかと。情報の伝え方というのも、うまく考えていくと、少なくとも、関わっている人は自分の役割や意味合いを感じてもらえると思う。今のハイテクに頼り過ぎるのも厳しいのではないかと。情報的に孤立する人というのはたくさんいる。どれだけ訪問したとしても、それだけでは、孤立は防げない。東京などは、人はいくらでも周りにいるのに、孤立死が起こっている。そういったことのクオリティーを上げていくというのは、難しいことであるが、佐久市ならば可能性があるように思う。

委員 確かにこちらの地域では、都会とは違って、周りの人が気にかけてくれる。隣の人は知らないというのではなく、顔を見れば声を掛ける、この地域の非常に良い所だと思う。あとは、やはり生活の足をどうするという事ではないか。非常に良い視点でご意見いただいた。

委員 佐久市は、保健・福祉・医療が、充実した地域であると思うが、それを全面に打ち出してしまうと、元気でない高齢者も来てしまうのではないかと思う。移住してきた人が、いずれ弱ってくるというのは仕方がないが、まずは、元気な人に、より多く移住してきてもらうというのが、一番大事ではないか。そういった意味では、都会の方に、地域活動や公民館活動、ボランティアについて、情報を提供していくことが非常に大切であり、佐久のファンを増やすということも重要である。よその住民でも、地域活動に参加できる仕組みを作って、全国的に発信していくことも必要であると感じた。「都市型」、「農村型」と2つの形態があったが、「農村型」については、需要はあって、売り込み先はたくさんある。ただ、興味を持っている人は、たくさんいると思うが、相対的な数とすれば、そこまで多くはないと思う。その中の一部の人が移住してくるのではないかと思う。一方、「都市型」の方は、なかなか難しいと思う。首都圏から佐久市へ移住してきた方々も知っているが、元気なうちは良いのだが、元気でなくなったら、入ってくる情報が減り、だいたい孤立している。そういう意味で、市の中心部に移住してきた人達に、地域活動などに参加してもらうということが、難しいことであるが、大事である。そうしないと「農村型」ほど、うまくいかないと思う。保健補導員についても、都市部より農村部の方が住民のことを把握できており、よく知っている。地域活動についても、同じようなことが言えると思う。佐久平駅周辺にサ高住を造った時に、その移住者が、何らかの地域活動に参加できるような仕組みを作らなければいけないと思う。都市部に移住してくる人と農村部に移住してくる人では、やはり需要が違う。都市部に移住する人は、より知的な活動や活動的なプログラムというものに興味を持つと思うので、そういったことが提供できるようにしていかなければいけない。1点質問であるが、移住してくるのは、なかなかハードルが高いと思うので、Uターン者を勧奨するというようなことは実施しているのか。Uターン者ならば、佐久市のことをよく知っているので、溶け込みやすいと思うのだが、何かやっているのか。

事務局 移住施策というのは実施しているが、Uターン者をターゲットとしては、特に行っていない。

委員 「移住お試しツアー」などには、佐久市出身者や長野県出身者という人が参加することはないか。

事務局 地域創生の関係でアンケートを実施したが、これは若い方を対象としたものである

が、引っ越してきた方を見ると1/3はUターン者であった。Iターン者は1/3程度であった。人口構成で見ると、60代で数値が上がる。それを見ると、Uターンしている方というのも多いのではないかと思う。直接どうであるかというデータは取っていない。

オブザーバー 何人いるかというデータは分からないが、自然に帰ってきているというのは、見ていて感じる。そういう方は、選択して帰ってくることもあるが、使命として帰ってきている方もいるのではないかと思う。

オブザーバー Uターン者であれば、市に相談しなくても、地元のことはよくわかっているので、問い合わせは少ない。逆に、空いている家を「空き家バンク」に登録していただくよう所有者の方に、ご案内を差し上げ、その後、実際話をして、家を売りたい、貸したいという人はいる。そういった方が、なぜ都会に出ていったかと言えば、都会へのあこがれというのがあり、それからずっと都会で生活していれば、なかなか地元には戻らない。また、自分は戻りたいが、奥さんが賛成しないという方もいる。

委員 終の棲家ということで移住してくるには、相当の決心がいる。そこまで達するにはステップが必要である。佐久市の良さを分かってもらうには、ステップを踏んで、移住に結び付けていくことが必要である。

オブザーバー 移住希望者に対して、市も良い部分だけを言わないという姿勢も必要である。実際来てみて、寒さが厳しかったり、交通の利便性で期待に応えられないという実態もある。そういうことも説明した上で、移住されようとする方々が、しっかりした目標や目的、あるいは価値というものを持っていないと乗り越えられないと思う。ただ、その価値というのは、みんなが見出してくれるものではない。佐久市にあるものに関して、価値と感じてくれる方とのマッチングを考えると、どのくらいの範囲で発信するか、どのくらい正確に理解してもらえるかというのを見極めていく必要があると思う。今回の構想に関しては、首都圏で情報を正確に発信していくというのが成果に結びついていくのではないかと思う。不正確な情報で期待値だけ上げて、来てみたらそうではなかったというのでは、お互いにとって不幸ではないかと思う。この構想には、情報を正確に届けるための東京圏での発信地というのも盛り込んである。

委員 確かに、佐久市は、すごく寒いですが、雪は少ない。寒いと言うと、雪深いというイメージがあるが、そうではない。ただ、そういうことは、都会に住んでいる人には分からない。そういったこともきちんと説明した上で、お試し居住などを実施して、佐久市を知ってもらう必要がある。

委員

今後、検討して中では、どのように進めていくかということが問題になってくるが、司令塔をどうするのかということが一番の肝になる。なぜ、司令塔が大事なのかというと、このように議論して構想を詰めていき、こんな施設ができるということ、住民に簡単に話をしてしまうということがあるが、それを言った段階で、アウトになってしまう。それを言った段階で、住民は、やってもらう側に回ってしまう。ここからが一番難しいところになる。地方創生本部で自治体の役割ということを行っているが、自治体が音頭を取ると、どこで事業者に渡すのかというタイミングが非常に難しくなる。日本版CCRCの有識者会議が、なぜ「民間が事業主体」ということを打ち出しているかということ、事業者に主体性を持たすということ、住民自治を強く反映させるということをしてしないと失敗するということを示している。「持続可能」ということには、2つ要因がある。経済的に回っていくということが一番大きい。もう1つは、「誰かにやらされている」という感覚では、いずれ辞めてしまうということである。住民が「自分たちがやっている」という意識を持つということができないと「持続可能」ということにはならない。このことが非常に難しい。私共は、地元がやろうという意志を示すまでは、こちらからは、案は持ちかけず、地元が出してきたものに対して、アレンジをしていくというスタンスを取っている。事業化しているところでは、住民自治の中で、「地域」、「医療」、「福祉」、「情報」という部会ができてきている。この4つに部会に専門家を充てるというのは絶対にダメである。佐久市は、医療のレベルが非常に高いが、敢えて、「ど素人が医療に対してモノを申す」というような観点が大切である。住民や学生など、実際の現場の声を聞く。そこから面白いものが生まれてくる。また、そこから出てきた課題をどのように解決していくかということが住民自治である。自分の身近にある課題を解決することが、「まちを作っている」という感覚を持ってもらうように、今から手法的にやっていかなければいけない。行政の押し掛けになってしまっただけでは、失敗した時、「やれと言われてやったから失敗した」となってしまう。ここからの仕掛けが本当に重要である。ハードの問題ではなく、ソフトを詰めていかないと続かない。住民が自ら動いていくような仕掛けが重要である。それには、計画段階から、ある程度オープンにして意見を取り入れるということをやっていかなければいけない。その辺の対応がなかなか難しいと思う。

委員

次のステップに向けて、大変貴重な意見であった。

事務局

おっしゃるように、全体の構想の中で扱うべきものと、地元に入ってから具体的な計画の中で扱うべきものがあると思う。参考資料で配布してある「深堀が必要な論点」については、多くが地元と検討いただかなければいけないものと考えている。今後、コーディネーター等についても考えていかなくてはならないが、その辺りについてもまたご意見をいただければありがたい。

《 4 その他 》

事務局より次回検討会日時について説明

《 5 閉会 》